キタキツネのキキ 7

作　なかむら よしひろ

トトのおうちからの帰り道のことです。どこからか人の話し声がしました。キキは何かもらえるかも知れないと思い、その声のする方へ近づいていきました。すると男の人が2人、話ながら歩いていました。その時です、一人の男の人が

「あっ、キツネだ」と言って肩にかついでいたぼうのようなものをキキに向けました。「パン！」いきなり大きな音がしてキキの目の前の小石が大きくはね上がりました。キキはおどろいてクマザサの茂みに飛び込みました。そのとき、もう一度あのパンという音がして、今度はキキのしっぽを何かがかすめました。男の人たちが大きな足音を立ててキキの方に近づいてきます。キキはクマザサのずっと奥の方にもぐりこみました。

「ちぇっ、逃げられたか、当ったと思ったけどなあ」もう1人が「あんな近くではずすなんて、へたくそだなあ」と笑っています。

その人たちの声が聞こえなくなるまでキキはクマザサの茂みの中でじっとしていました。そして足音が遠ざかるといそいでおうちに帰りました。キキは息を切らせながらお母さんに話しました。するとお母さんは「それは鉄砲と言って人間が私たちキツネやシカさんやクマさんをうつ道具なの。人間ってあなたたちにお菓子をくれるやさしい人たちばかりじゃないのよ、鉄砲を持った人には絶対に近づいちゃだめよ。」

「どうして僕たちをうつの、うって食べちゃうの」

「いいえ、むかしは私たちは殺されてえりまきにされたけれど、今はちがうの。えりまきにもしないし食べもしないくせにただ殺すだけなの。私たちは生きていくために仕方なくネズミや虫を食べるけど、人間のなかにはキツネやシカを鉄砲でうって殺すことを楽しみにしている人がいるの」

キキはその夜、自分が鉄砲でうたれてえりまきにされる夢を見て目をさましました。

7月になると道路わきには草がいっぱいおい茂りました。食べものをもらおうとキキとニニが道路にすわっていても草のかげになり、走っている車から2匹の姿が見えにくくなりました。それではせっかく子どもがたくさん乗った自動車も止まってくれません。

きのうの夕方から何も食べていない2匹のおなかはぐうぐう鳴っています。いつもの展望台に行けば何か食べものをもらえるのですが、お母さんにるすばんを頼まれていたのでおうちからあまり遠くにはなれるわけにいかなかったのです。ニニが言いました。

「お兄ちゃん、こんな所にじっとしていたって誰も見つけてくれないわ、もっと道の真ん中へでましょうよ」

「だめだよ、お母さんが危ないから道の真ん中には出るなって言ってたじゃないか」

「でも、ここにじっとしていたって何にも食べられないわ」

「もうすぐお母さんが帰ってくるよ、きっと何か持って帰ってくれる、それまで待とうよ」キキはニニに言い聞かせました。

さらに1時間ほど道路のすみにすわって待ちました。その間に車はなん台も通りましたが、1台も止まってくれません。そしてお母さんも帰ってきません。

その時むこうから1台の車が走ってきました。ニニがしびれを切らせて道の真ん中へ歩きはじめました。その車はとてもスピードを出していたのでキキがおもわず、

「ニニ、あぶない」とさけびました。どうじに道路の反対側からお母さんが「ニニッ！」とさけんでニニに向かってとび出してきたのです。

いっしゅんの出来事でした。猛スピードで走ってきた車がニニとお母さんをはねとばしてしまったのです。ふだんのニニならそんな猛スピードで走ってくる車には決して近づかなかったのですがお腹が、すきすぎてみさかいがつかなくなっていたのでしょう。それをたまたま帰ってきたお母さんが見つけ、助けようとして2匹ともひかれてしまったのです。

（4月号へつづく）

□発行／南富良野町役場　編集／企画課 広報統計係　Tel.52-2115
□ホームページアドレス http://town.minamifurano.hokkaido.jp

古紙配合率100パーセントの再生紙を使用しています。

☆今月の表紙　初めてのスキーを体験（冬の北海道体験の翼）